

2026年の芒種(ぼうしゅ)は6月6日(土)から6月20日(土)までの期間です。

芒種の「芒(のぎ)」とは、稲や麦の穂先にある針のようなツツンした突起のことで、小麦の成熟と収穫を意味し、種は、稲の田植えを意味します。

つまり、この季節は、小麦の収穫と稲の田植えを両方しなければならない一番忙しい時期となります。

「種を蒔き、その植物が成長していく姿」から、「芒種は縁起が良い」とされているようです。農家の忙しい芒種を歌った詩として最も有名なのは、中国・唐代の詩人、白居易(白楽天)の『**観刈麦(かんがいばく)**』です。

「田家に閑月(かんげつ)なく、五月人倍(ひとます)ます忙し」という有名な一節で始まり、麦の収穫と田植えが重なり、炎天下で極限まで働く農民の過酷な様子が生々しく描かれています。

『観刈麦』の冒頭部分は以下の通りです。『観刈麦』(白居易)より抜粋

<田家少閑月、五月人倍忙。夜来南風起、小麦覆隴黄>

(田家に閑かなる月が少なく、五月に人ますます忙しい。

夜に南風起こり、小麦がうねを覆いて黄色く実る)

【現代語訳】農家には仕事が暇な月が少なく、五月になると人々はいつの倍も忙しくなる。昨夜から南風が吹き、畑の小麦は実って黄金色に覆われている。足元は熱い土の湿気に蒸され、背中は夏の太陽の光に灼きつけられる。力尽きるまで働くので暑さも忘れてしまうほどだが、ただ(作業ができるように)夏の日が長いことだけを惜しんでいる。

白居易が描いた農民の過酷な労働と生活状況は、この季節を代表する情景として広く知られて、貧しい農民たちの苦境と過酷な税の矛盾を告発したのが観刈麦です。

初夏のうだるような暑さの中、農民たちが一家総出で麦刈りを行う様子が描かれ、南風が吹いて麦が黄色く実る頃、女性は昼食を運び、子供は水を汲んで手伝います。

重労働にあえぐ農民たちを見るにつけ、白居易自身は汗水流して働くこともないのに、高い官職と多くの禄(給料)を得ていることへの強い罪悪感が詠まれています。

白居易は、この詩を通して農繁期の過酷な現実を為政者に伝え、搾取の構造に対する痛烈な社会批判を行いました。贅沢な暮らしを反省し、政治によって苦しむ民衆を救いたいという彼の精神が色濃く表れています。芒種という季節の持つ豊かな実りの背後にある、農民たちの血のにじむような労働と社会の格差を象徴する作品として広く知られています。



1565年製作ピーテル・ブリューゲルの「穀物の収穫」